

詩集
呼子と口笛

石川啄木

詩

集

石川啄木

呼子と口笛

河 出 書 房

笛口と子呼

昭和二十四年六月十日初版印刷
昭和二十四年六月十五日初版發行

定價百圓

著者 石川啄木いしかわ たくみ

發行者 河出孝雄かわい けいこう
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

編集者 石川正雄いしかわ せいこう
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

印刷者 牧恒夫まき ことお
東京都西多摩郡鹿村根ヶ布三八五番地

發行所 株式會社 河出書房かわい しょぼう
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

電話神田(25)三一七四番
振替口座東京一〇八〇二番
會員番號A一一〇一四番

啄木全集

株式會社大化堂印刷・製本

目次

呼子と口笛

はてしなき議論の後(一).....	三
はてしなき議論の後(二).....	四
ココアのひと匙.....	七
書斎の午後.....	八
激論.....	九
墓碑銘.....	一一
古びたる鞆をあけて.....	一五
呼子の笛.....	一六
明るき午後.....	一八
家.....	二〇

飛行機……………二

ハコダテの歌

水無月……………三〇

年老いし彼は商人……………三三

辻……………三六

蟹に……………四〇

馬車の中……………四二

戀……………四四

戯作……………四六

小樽のかたみ

無題……………五三

〇夕暮……………五五

燕……………五七

公孫樹……………六〇

雪の夜

四

幽思

六

泣くよりも

窓

七

何故に

三

白き顔

五

泣くよりも

五

嫂

七

殺意

六

辯疏

九

小さな墓

八

虚白

流木

五

黒き箱

八

今聞ゆ

老	人		八九
白	骨		九二
一塊	の土		九五
山	頂		九六
森	の中		一〇〇
無	題		一〇五
青	き家		一〇五
失せにける色	赤き花		一〇八
黒	き鍵		一一一
無	題		一一二
遠	き星		一一三
木の實は色	づきぬ		一一四
無	題		一一六

今聞ゆ……………二八

無題……………二九

わが星……………三三

『明星』より

わが少女も……………三五

物なやみ……………三六

おどろき……………三八

心の姿の研究

夏の街の恐怖……………三九

起きるな……………三五

事ありげな春の夕暮……………三六

柳の葉……………三八

峯……………四〇

騎馬の巡査……………四二

遺稿より

屋根

一四五

秋の夕

一四九

辻

一五一

渡鳥

一五二

破れた腰掛

一五三

冬の夜

一五四

断章

一五五

散文詩

曠野

一五八

白い鳥・血の海

一五九

火星の芝居

一七〇

二人連

一八一

祖父

一八七

あ
と
が
き
………
一
九
解
説
………
壺
井
繁
治

呼子と口笛

はてしなき議論の後（二）

（一一九一・六・一五夜）

暗き、暗き曠野にも似たる

わが頭腦の中に、

時として電のほどばしる如く、

革命の思想はひらめけども――

あはれ、あはれ、

かの壯快なる雷鳴は遂に聞え來らず。

我は知る、

その電に照し出さるる。

新しき世界の姿を。

其處にては、物みなそのところを得べし。

されど、それは常に一瞬^{しゆん}にして消え去るなり、
しかして、かの壯快^{さうがい}なる雷鳴は遂に聞え來らず。

暗き、暗き曠野にも似たる

わが頭腦^{ごう}の中に、

時として、雷のほとばしる如く、

革命^{かくめい}の思想^{しきう}はひらめけども――

はてしなき議論の後 (二)

1911. 6. 15. TOKYO.

われらの且つ読み、且つ議論ぎろんを闘たたかはすこと、

しかしてわれらの眼の輝かがやけること、

五十年前の露西亞ロシアの青年に劣らず。

われらは何を爲すべきかを議論す。

されど、誰一人握こぎりしめたる拳こぶしに卓たくをたたきて、

V NAROD! と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、

また、民衆の求むるものの何なるかを知る、

しかして、我等の何を爲すべきかを知る。

實に五十年前の露西亞ロシアの青年よりも多く知れり。

されど、誰一人握こぎりしめたる拳こぶしに卓たくをたたきて、

V NAROD! と叫び出づるものなし。

此處にあつまれる者は皆青年なり、

常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。

われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂に勝つべきを知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
「NAROD!」と叫び出づるものなし。

ああ、蠟燭はすでに三度も取りかへられ、
飲料の茶碗には、小さき羽蟲の死骸浮び、

若き婦人の熱心に變りはなけれど、

その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。

されど、なほ誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

「NAROD」と叫び出づるものなし。

ココアのひと匙

1911. 6. 15. TOKYO.

われは知る、テロリストの
かなしき心を――

言葉とおこなひとを分ちがたき

ただひとつの心を、

奪はれたる言葉のかはりに

おこなひをもて語らんとする心を、

われとわがからだを敵に擲げつくる心を――

しかして、それは眞面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。